

紀下369P
1251

紀下369P
392

武術 538 羽林 1460P

4685 20P

紀下369P

4744P-1/3

4.687P-1/4

燃土と燃水

天智紀七年（六六八）七月条には、
栗前王を以て、筑紫率に拜す
という文に引き続き、
次のように記されて

時、近江國、武を講ふ。又多に牧を置
きて馬を放つ。又越國、燃土と燃水とを献
と記されている。

を行なったのではなからうか

天智七年七月に筑紫率となった栗前王は、
近江國に相当する筑紫國に集結している
兵達の武術の向上を図る為、連日激しい調練

て、唐・新羅との決戦に備えたのであろう。

壬申乱（六七二）において、栗前王は大友皇
子の威圧に屈さなかったのかも知れない。

筑紫國から石炭（燃土）が献上され、

唐 647 唐 1517 唐 1007
⑤ 4,744

吉川英治 村松道平 1007
三〇五-385 395 546
百利年①

島陰 460 4,687-2/4

百利①-373
④ 4686-1/2

らに越国（越後）から石油（燃水）が献
上された。ようたに想像される。
は、石油所縁の土産物の類のことだろうと
する見解もある。（「世界大百科事典」平凡社
へ石油の由来参照）
なるほど、燃土と燃水とか、天智七年七月
に始めて珍物として貢献されたとも解される
しかしなから、もしも、
へ筑紫国から石油が、越国から石油が、同
時に献呈された
というのであれば、あまりにも偶然すぎる
といえよう。
もしも、朝廷が燃土（石油）と燃水
石油とを差し出すように命じたのではないだろうか。
① 有明海の入口あたりや瀬戸内海の島陰等に
大小を問わず無数の船を常に停泊させ、
② 浜辺の幾つもの柴屋に、大量の枯れた柴を
たくわえさせ、
③ そして、庫には石油と石油とを厳重な監視

せんたい
船隊 元1290

4,687⁸-3/4

かちた

漕ぐ 元772⁸

のもとに保管させて、
ひたすら出撃の時を待つ。ことにわたのかも知
れない。
■いざ決戦、となった時には、
(1) 米こしら多数の船に柴を満載させ、
敵の軍船近くへ群がり寄せせよ。
(2) 石油を降り注
いだ船上の柴の中へ、真赤に燃える石炭を投
げ入れさせようや
という策略だったのではなかろうか。
■石炭は、いったん火がつくと火力が強くな
り、着火すると
少々雨がかかっただけでは消えないので、
点火用として最通のものと考えられたように
思われる。(第一巻末尾の年表へ六六八年七月参照)
■敵の船隊が、有明海や瀬戸内海の奥深くへ
侵入してきた時、柴と、石油と、
真赤のついた石炭とを積み込んだ無数の船が、
風上から忍び寄ってきて、一瞬にして火の船
団と化したら、一体、どういふ結果になるか。
■あろうか。
■恐らく、

墳蔵 363' 三口史(Ⅱ)-385^p
 目録 218' 火の車 小林 600'

場^ばから泳^{およ}ぎ去^され^ばい^いいの^ので^であ^ある。

 船^{ふね}子^こ等^らは^は下^{しも}の^の端^{はし}を^を長^{なが}く^く靡^{なび}かせ^{かせ}な^なが^がら^ら海^{かい}上^{じょう}戦^{せん}闘^{とう}の

舟人達は、自分の舟に火を付けた後、海中へ飛び込んで泳ぎ、待機してゐる船もいくは海辺へ向かえばよい。

敵船てきせんの間あひだに放はなつこともあつたようである。
 (「広辞苑」へ茅船かやぶね参照)

収^と薄^{はく}い^いな^ない^い。
 ⑩ その惨^{さん}状^{じょう}を、
 敵^{てき}の^は本陣^{ほんじん}に^し知^しら^らせ^せる^るこ^こと^とが^が重^{おも}要^{よう}な^なの^のだ^だ。
 ⑪ 柴^{はしばな}で^でなく^{なく}

目論むに
 へ全部の船を壊滅し、
 さんざ傷めつけた後に、
 の体で辛うじて逃げ帰る
 と目論まれたに違いないや
 ように仕向けよう

「無事^{ぶじ}に帰^{かえ}れる船^{ふね}は少ないであうう」と推察される。(「三国志」吉川英治、望野の巻へ赤壁の大襲撃参照)

429(2017)523~28
令和2(2020)6.9(水)
時だい 2039

菩提をとむらう

西和大学

160+

④449
-1/2

4,688^P

天のき
改行

天の...
380^P

とうとう
唐突 元1576^P

天皇、天命將及るか

天智紀七年(六六八)七月条には、何と唐突にも

「時の人の曰はく、曰天皇、天命將及る

か」といふ

と記されている。

あるいは、七月のある日のこと、大倭国

(肥後国)の古京からあめただしく馬を

乗り継いで火急の知らせが入ったのであ

らうか。

「天皇の天命が尽きようとしておられます

という悲報だったのであろう。」

「そして先述のように、香明天皇(上皇)は

天智七年(六六八)七月頃、一六十八歳で

崩御されたように思われる。(第八十二章

「香明天皇前」の項において既述巻末の「系年表」を照

母香明上皇を想う哀しみは深く、そして浮

人では消えてゆく数々の思い出が切なくも天

智天皇の胸の内を苦めたと相違ない。

「せめて、今からでも母上の菩提をとむら

う為、何かしてさああげたい」

「そしてその願いは、時とともにつのつてい

1122 難 92P

続紀(5)①-80P
② 緑①-147

続日本紀(5)1-80P
西暦大正161P

4689P
4768P

4768P
4768P

H1.1/17(4)⑤
→

観世音寺(観音寺)

何時のときだったのか詳らかでない

天智天皇は、

大宰府に、母有明天皇御追福の爲め、一

宇創建する

と勅願を發し給うた。↑↑↑↑↑(「日本社寺

大観」名著刊行会、八観世音寺✓参照)

大宰府の都府楼から東へ行くとすぐのところに

奈良時代には名実ともに国家的な大寺

であつたと伝える。観世音寺がある。

その草創について、続日本紀の元明天皇

和銅二年(七〇九)二月一日条に、こう記

されてゐる。

詔して曰く、筑紫の観世音寺は、淡海大

津宮御宇(天智天皇)、後岡本宮御宇(天

皇(有明天皇)の奉為に、誓願して基きし所

なり。年代を累ねと雖も、今に迄るまで了ら

西都大 247^P 末 こと 胸が痛む 2156^P
施入 1253^P

西都大 161^P 4.691^P

162^ろ 侵攻 1147^ろ
罹災 2312^ろ → H1.1.18

④ 4591^P
4764^P

（西都大 247^P 末 行参照）
二四七頁、末行参照）

群中の第三倉から出火した火は、折からの冬の西風にあおられて燃え広がった。中門および南門を焼き、瞬く間に観世音寺をも焼きた。この時の火災によって、大宰府の町の北半部が見渡す限りの焼野原となつてしまつたのであろう。と想像される。ところか、その罹災の翌年に、壬申乱（六七二）が勃発する。そして、天武天皇の御代を迎へることになるが、唐・新羅軍の侵攻が懸念される緊迫したこの当時にあつては、大宰府政庁の再建および防衛施設の充実に力を注ぐことが第一とされ、観世音寺の建設には手がまわらなかつたものと思われる。

一か一なから、天智天皇・天武天皇の母、明天皇の為に発願された観世音寺に、長らく放置されたままであることに、天武天皇は心を痛めておられたのであろう。あかみとり

■朱鳥元年（六八八）天武天皇は、筑紫の観世音寺に封二百戸を施入されたのだった。

西都大宰府 163° 観世音寺の所部は 162° 西都大宰府 162°
M. 1. 19 (木) 4602° 4692° 4764° 4690° 4694° 4689°
落慶 2702° 藤原純友の乱(941)の時に焼けるもった 4600°

また、そののち数度にわたって、観世音寺
造営のために、筑前・筑後の水田や山林等の
施入が行なわれた。(西都大宰府「一六二頁参照」)
そして和銅二年(七〇九)二月一日に、
観世音寺は、今に迄るまで了らす。――
――早やかに営み作りむべし――
という詔勅が出され、――天平十八年(七四六)
六月になつて、ようやく落慶したのだつた。
完成後の観世音寺の歴史は、大宰府の盛衰
と軌をおなとくする。
●先に述べたように、
――天慶四年(九四一)の藤原純友の乱の時
には、大宰府政庁も、観世音寺も、焼
失をまぬがれた。――
ようである。(第八十四章へ大宰府の盛衰、
第三期の項において既述)
――しかし、平安時代後期の康治二年(一一四
三)の火災によつて、観世音寺は終局する。
●以後、これを再建した記録はなく、それを
企てようとした史料すら残っていない。(「西
都大宰府」藤井功、日本放送出版協会、一六

観世音寺 阿内蔵庫由3522 西都大宰府170^P
（2）次頁の図

4,693^P-1/4

世針 昔時 店1236 西都大宰府164^P

一六一六四頁参照

米

現在みる観世音寺の講堂および金堂は、元禄二年（一六八九）に建てられたものである。加、原位置に再建されたものとは、あきらかな。では、昔時の観世音寺の七堂伽藍は、どのような規模と配置であったのだろうか。

それを示す資料として、延喜五年（九〇五）に作成された資財帳（重要文化財）がある。この資財帳と、現代に残る遺構とを対照させてみると、

「塔が東、金堂が西にあって向かいあい、それを囲む回廊が中門から講堂を結んで閉塞した空間をつくっている」

ということが特徴となっている。第508・509図・写真

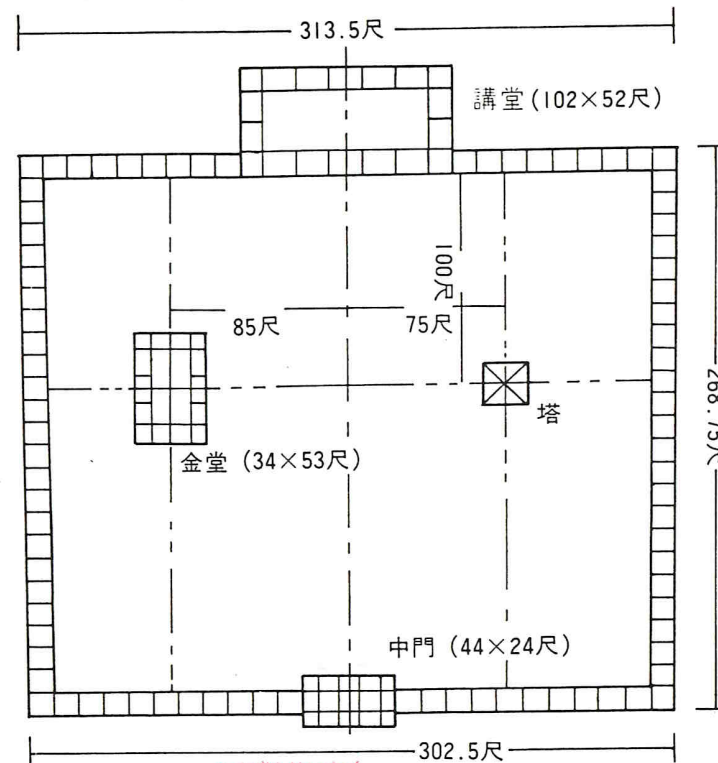
「観世音寺」と呼ばれる堂塔の

配置を形造っているものである。（「西都大宰府

とされたのだった。

4693^P - 3/4

・ 右頁の上半分に掲載して下さい。



14GG 第508図

観世音寺伽藍復原図 (福山敏男案より)

13GG

『西都大宰府』藤井功、日本放送出版協会、165頁参照。

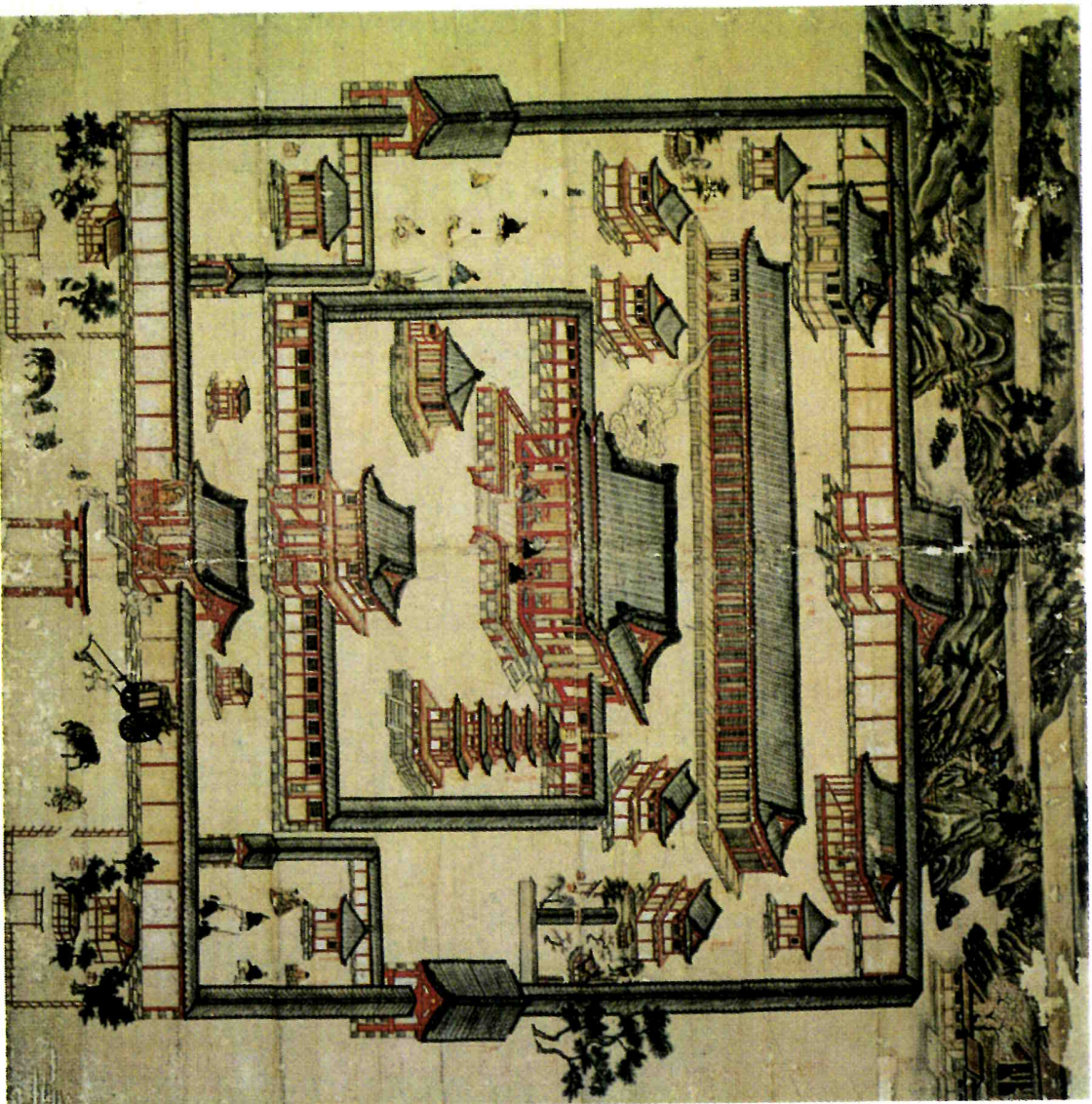
4785^P 119

4785^P

697

左頁の上半分に掲載
17下さい。

紙の折り目、22。
↓



4,693^p-3/4

698

中にさいわい
1404

第509図

観世音寺絵図

室町時代

観世音寺

著作権洋誌は、不要と思われる

1204

● 室町時代末期に模写されたとみられる境内図。講堂と中門を廻廊で結び、その中に、西に東を向く金堂、東に五重塔が向かいあって建つ。観世音寺式とよばれる独特の伽藍配置である。

1304

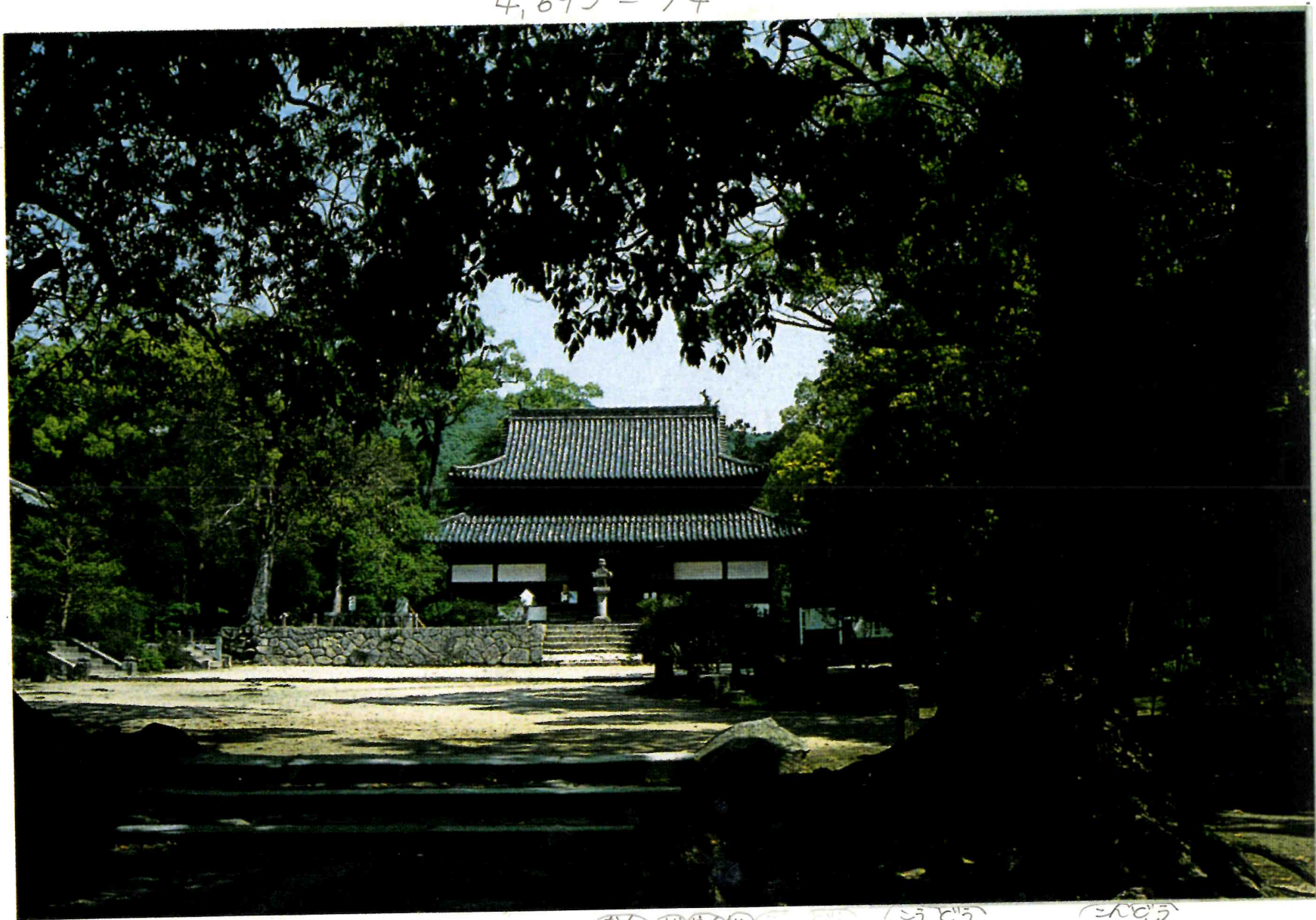
『太宰府天満宮』神社紀行(49) 学習研究社 2003年11月13日発行

13頁参照

4,693^P - 4/4

左頁の下半分
に掲載して
下さい。

この建物（金堂）を
カットなりで
下さい。



ニニク、
塔が
ある等
です。
カット
しないで
下さい

13QG

14QG 写真図版 732 現在の観世音寺^{（かんせいおんい）}正面は講堂^{（こうどう）}。左手に金堂^{（こんどう）}が見えている。

699^P

『太宰府天満宮』神社紀行(49)、学習研究社、4頁参照。

13QG

観世音寺は天平時代に創建され、当時は九州を代表する大寺院だった。数多くの仏像の名品と日本最古の梵鐘があることで知られる。

699

4695-1/1

(二)

④ 3523 ④ 3532 筆墨

4,694^P - 1/2

小計 710^P
私

④ 3522^P

④ 4692^P 中々
先述のように

藤井功、日本放送出版協会、一六四〇一七〇
頁参照)

*

一方、~~前~~述のように、熊本県最古の陣内

廃寺口 (益城郡城南町陣内) は、

「とうてい郡立の寺や地方豪族の手になる

私寺だとは考えられない。

それは、一国の国府を背景とする寺院であ

る、と断定せざるを得ないし

とわけるほどの豪壮な寺だったようである。

「熊本県の歴史」森田誠一、山川出版社、

四二頁参照。第六十八章、崇峻天皇へ二つの

寺、日法興寺口と日元興寺口✓の項において

既述)

この物語においては、甚だ定かならないもの

と、なから、

八蘇我馬子宿禰大臣が総力を注ぎ、八人で建

立した一大寺院口法興寺口は、

口陣内廃寺口のことなの、~~た~~あうう✓

と解釈して述べてきた。

(三)

H30(2018)11.11(日) 新や(1)-9149 紀F168P
 ③3533 焼失 4,694P-2/2 ④4692P 759
 ③3522P ③3522P ③3522P ③3534P
 小野町76 ③3522P ③3534P ③3522P ③3534P
 白鳳時代の遺跡として残る陣内廃寺(七
 四〇し七五〇年頃焼失)は、瓦文様や伽藍配
 置の点で、大宰府の観世音寺とよく似ており
 陣内廃寺も、観世音寺も、共に壮大な
 伽藍をもつ中央様式である
 という。(「熊本県の歴史」森田誠一、山川
 出版社、四二頁参照)
 ここに、特に注目されることがある。
 「観世音寺は、天平十八年(七四六)六月
 に落慶したのだったが、丁度この当時
 の七四〇し七五〇年頃に、陣内の壮麗な伽藍
 が焼失した」
 とみられてい
 る。すなわち、陣内の寺の方か先に建立された、こ
 れを模して観世音寺が造られたとも解釈でき
 そうである。
 ようするに、陣内廃寺は崇峻元年(五八八)に作り
 始められた弦興寺とあり、観世音寺は
 この由緒ある弦興寺(陣内廃寺)の様式にな
 らうて造られたものでなかろうか。

と推察される。(第一巻末尾の年表へ五八八年参照)
 想察
 *

白鳳時代の遺跡として残る陣内廃寺(七
 四〇し七五〇年頃焼失)は、瓦文様や伽藍配
 置の点で、大宰府の観世音寺とよく似ており
 陣内廃寺も、観世音寺も、共に壮大な
 伽藍をもつ中央様式である
 という。(「熊本県の歴史」森田誠一、山川
 出版社、四二頁参照)
 ここに、特に注目されることがある。
 「観世音寺は、天平十八年(七四六)六月
 に落慶したのだったが、丁度この当時
 の七四〇し七五〇年頃に、陣内の壮麗な伽藍
 が焼失した」
 とみられてい
 る。すなわち、陣内の寺の方か先に建立された、こ
 れを模して観世音寺が造られたとも解釈でき
 そうである。
 ようするに、陣内廃寺は崇峻元年(五八八)に作り
 始められた弦興寺とあり、観世音寺は
 この由緒ある弦興寺(陣内廃寺)の様式にな
 らうて造られたものでなかろうか。

かすやぐ 地名
糟屋部 421 妙心寺 376
4693-4/4

4,695^P-1/5

西都大府 171⁷ ム 鐘 玄 798⁸
古いつりかね

平安後期の史実
④ 4692⁷ 末 5⁷ 元 2056⁷

最古の梵鐘
65⁷

180

最古の梵鐘

観世音寺は、度重なる火災で創建当初のほとんどの全てのものを失ってしまっただか、唯一としてよい貴重な遺品である。梵鐘を現在にまでも伝えている。

菅原道真（八四五〜九〇三）か、都府楼はわずかに瓦の色をみる。観世音寺はただ鐘の声をきくと詠んだ蒼然たる古鐘である。

この鐘は、戊戌年（敏達七年）（五七八）もしくは文武二年（六九八）と考えられている。

銘を持つ京都妙心寺の鐘と同一の寸法同一の意匠であり、いわゆる姉妹鐘であって、共に我が国の鐘のなかで最古のものである、といわれている。

妙心寺鐘の内面には、戊戌年四月十三日壬寅收糟屋評造春米連

廣國鑄鐘（注意）

糟屋評（リ郡）の造である春米連広国が鑄造

4695^P-1/5

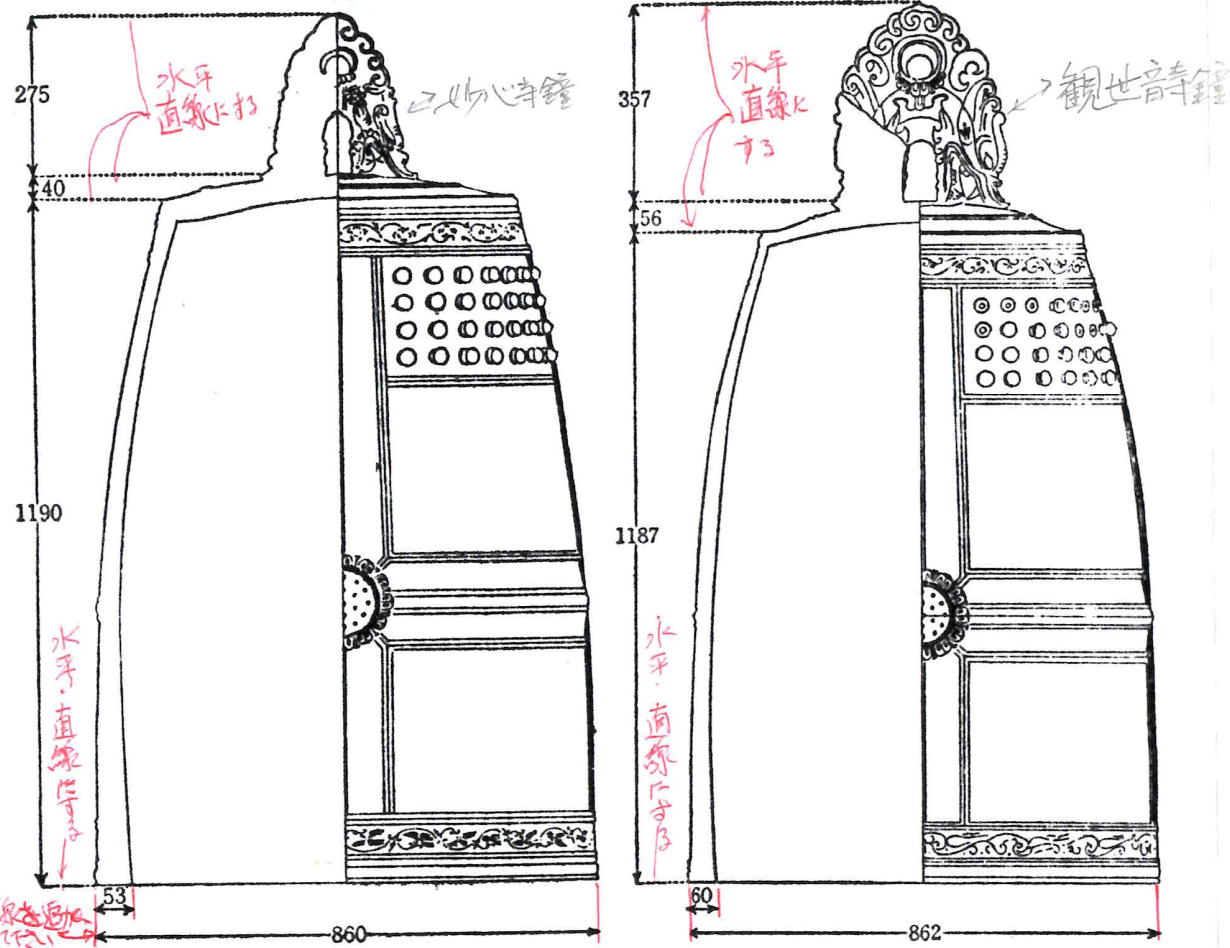
702 4695^P-3/5

4,695⁹-2/5 左右の図を置きかえて下さい。(観世音寺は西。妙心寺は東にあるからです)

右頁の上半分にはみ出し
大きく掲載下さい。

・現在の数字は小さすぎる。
大きい数字を入力して下さい。

・引き出し(線)が太かったり、
点線になったりしている。
すっきりした線にしておいて
下さい。



6本の縦線を追加
(7本に増やす)
中心よりゆけ
14QG

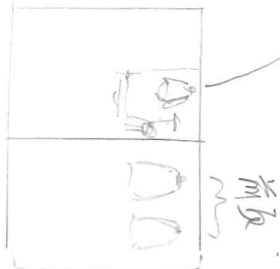
第510図 観世音寺鐘(左)と京都妙心寺鐘

(坪井良平「日本の梵鐘」)

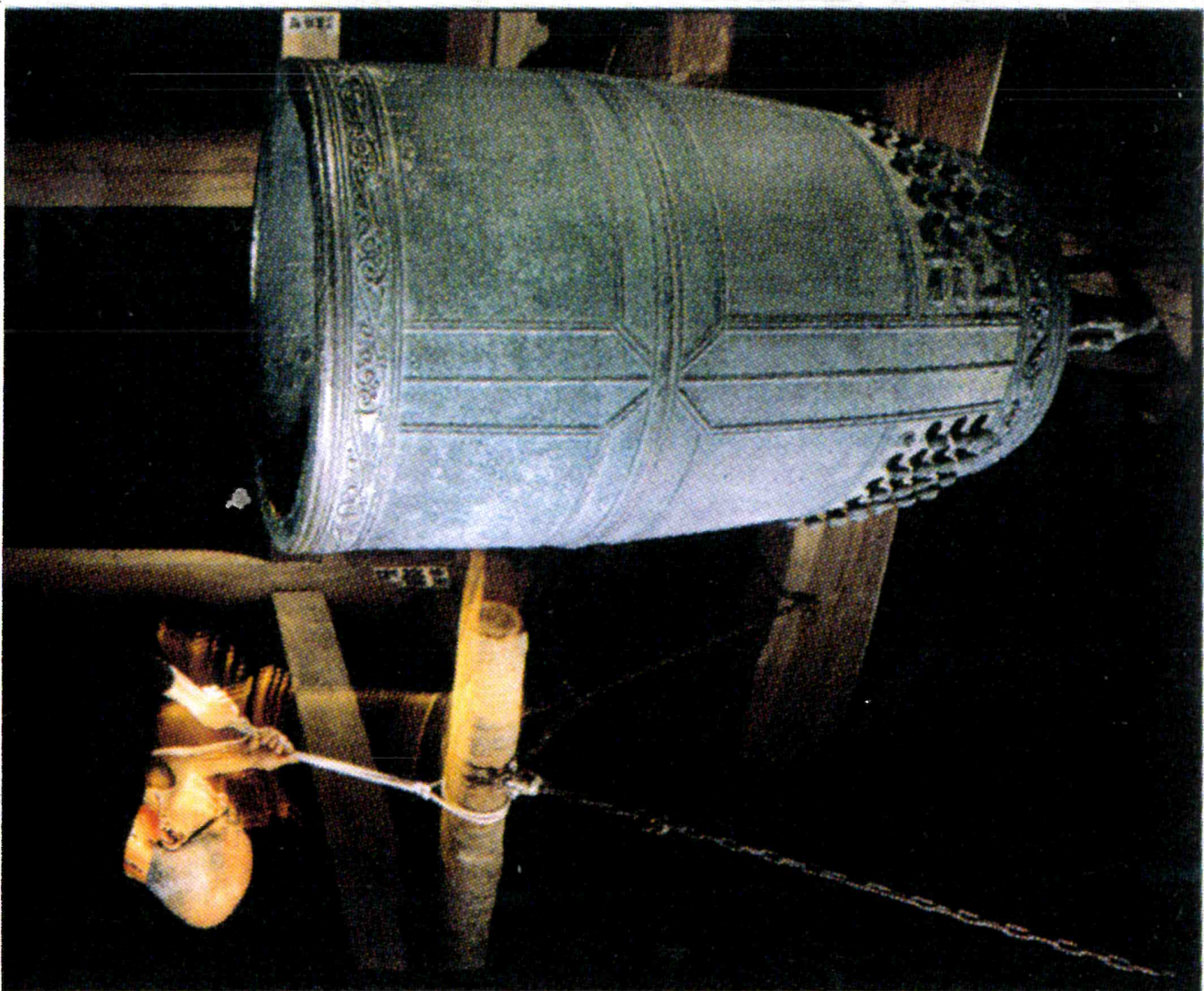
13QG

『西都大宰府』藤井功・亀井明德 日本放送出版協会 昭和55年9月20日第5刷発行 172頁参照

・カラー
・左頁の右上 (1/4頁)
上・右へ大きく
はみ出し
掲載下さい



4,695^P- 3/5



704 10月30日

1364

『観世音寺と九州の名利』(徳刊古きをゆく45) 小学館、2002年1月1日発行、35頁参照

1404

『観世音寺の除夜の鐘』

4.695^P-4/5

こと

ほうかく
発願 2041^P

（あるいは発願）一た鐘である
という銘がある。
一たかつて、両鐘とも筑紫国糟屋郡で鍛造
され、一方は在地に留まり、一方は京都へ運
ばれたことになる。という。（「西都大
宰府」藤井功、日本放送出版協会、一七一
一七三頁参照）

米

こと

小鉢410⁺
成 37426

小鉢1003⁺
鉢 37426

いご 359⁺
雨後 その後

4.695⁺ 5/5

干支表(改)
新(改)米

つと 3743⁺
夙 以前から
改 376

けんてん 小鉢219⁺
宣伝 さいはやす
伝えよ

な お、日本社寺大観^{（改）}寺院編、名著
刊行会^{（改）}妙心寺^{（改）}の項には、大略次のように
記さ小^{（改）}ている。^{（改）}京都^{（改）}

鐘樓内の銅鐘は、現に国宝に^{（改）}て、其音^{（改）}
声楽律中の黄鐘調に合すとて^{（改）}夙に^{（改）}宣傳さる。^{（改）}
内面の陽文に^{（改）}戊戌年四月十三日壬寅收糟層^{（改）}
評造春米連廣國^{（改）}鑄鐘^{（改）}の銘を存す。狩谷^{（改）}板^{（改）}育^{（改）}
の説に依小^{（改）}ば、戊戌年云々は文武天皇二年（六
九八）に当ると云ふ。ただし、寺伝によると

（江戸後期の考証学者）

敏達天皇七年（戊戌年、五七八）と云ひ、聖
徳太子が四天王寺六時堂前に於て聖靈会を営

ま小^{（改）}一時、樂律を整調するに比鐘を用い給ひ^{（改）}
爾後^{（改）}伝へて嵯峨^{（改）}淨金剛院にあり^{（改）}が、転々^{（改）}
て本寺に伝はるといふ^{（改）}

とある。もし^{（改）}かたら、敏達朝に兩鐘が筑紫國糟屋郡で
鑄成され、一つは觀世音寺に、一つは転々と

した後、妙心寺（京都市右京区花園妙心寺町）
へ伝えられたのかも知れない。

敏達朝当時に、筑紫國で兩鐘が鑄造された

と一ても、少しも不審なことはない。

*

と不押 お用お

706⁺

小鉢1001⁺
銅 1754

小鉢1008⁺
鐘 1754

續紀(6)② 43^末
紀下370^頁14

新ヤ(1)-421⁺

版④4683^{1/2}に4,696^{P-1/2}

紀下370^頁14 槍 443^{とらえ 小林}
新ヤ(1)-末55⁺

④4683^{1/2}

高句麗滅亡

高句麗は、六六八年(天智七年)九月十三

日に滅亡した。
唐の第三代

旧唐書、高宗紀に、

「九月癸巳(十三日)、司空英国公勣、破

高麗、拔平壤城、擒其王高藏及其大臣男建等

以歸。境内尽降。

とあるほか、その経緯は海外史料に詳し。

(天智七年)

しかし、高句麗滅亡のその詳報が日本

へ伝えられたのは、翌月の十月のこと

だったのであろう。

天智紀七年(六六八)十月条に、

「大唐の大將軍英公、高麗を打ち滅す。云

々レ

とある。
第一巻末尾の年表(六六八)参照(七二七)

なお、日本側は、續紀、神龜四年十二月条

において、高句麗滅亡を、天智七年

十月の二としていいる。

二と
22行3行

*

4696-1/2
9月13日とある

天智7年5月5日 高句麗へ

天智 814
紀下358

天智 814

紀下358

古代朝鮮 二〇三

こと けい 版 108

4,696-3/2

高句麗は、高句麗滅亡に至るまでの概略
の経緯を見ておくことにしよう。
● 先に述べたように、唐・新羅連合軍の関心
が、百濟の復興軍との戦いの方向に向いたため
高句麗との戦闘は、一時、小康状態と
なっていた。
● ところが、白村江の海戦（六六三）から三
年後の六六六年、高句麗の英雄泉蓋蘇文が死
ぬと、その子供たちの間に権力闘争が起こって
長子の男生が唐へ亡命するさむぎとなった。
● 唐の高宗はこれを機に、再び高句麗侵略軍
を編成した。そして、翌六六七年七月、新羅
にも出兵を命じ、高句麗侵略戦争がはじまっ
た。
● 高句麗は、善戦したが、翌六六八年（天智
七年）九月二十一日、力尽きて唐・新羅連合
軍の前に降服した、
という。↑↑↑↑↑（「古代朝鮮」井上秀雄、
日本放送出版協会、二〇三頁参照）

*

15.9.13 (日) ⑤
H9.4.12 (土)
H11.11.18 (木)

935年
高麗の王に
てばうれを
元 1128
935
-676
259

5059P 20
4,697P

711(ニ)ダリ
④4598P
古代朝鮮218

古代朝鮮 209
目論 企てた
④4687P-4689P

出版協会、二〇七し二一八頁参照)

と、いえる。(「古代朝鮮」井上秀雄、日本放送

今日の朝鮮民族を形成する基礎のできた時代

政治的・社会的・文化的に大きな変化があり

この時期の新羅は、三国時代の分水嶺とは政

年間をいう。(高句麗・百済・新羅の)

ら、新羅滅亡の九三五年までのおよそ二六〇

滅した後、唐軍を武力でしりぞけた六七六年か

統一新羅とは、新羅が百済・高句麗を

る。(第一巻末尾の年表へ六七六年参照)

を朝鮮半島から追いついて、まうことにな

達は、数度、唐軍の侵入を勝ち抜き、

六七六年(天武五年)唐軍

新羅の中央貴族達は、唐との提携に至眼を

置いていたようである。

新羅の地方豪族や下級貴族

置は、数度、唐軍の侵入を勝ち抜き、

六七六年(天武五年)唐軍

唐は、新羅

をも支配下ににおさめて、朝鮮半島全土を植民

地にしようと企てた。

「と237」 ④4658
④4719 2/4

葉狩り
紀下195 注39
紀下371 注30

4,698^P-1/2

④4719^P-3/4

④4443^P-1/2
④4666^P
④4717^P 3行へ

大倭国の古京

天智紀八年（六六九）正月九日条に、

「蘇我赤兄臣を以て、筑紫率に拜す」

とある。（第八章「重出記事」の項において既述）

*

「そいつ、同年の五月五日条に、

「天皇、山科野に縦獵したまふ。大皇弟（

大海人皇子）・藤原内大臣及び群臣、皆悉に

従につかへまつる」とある。

（六六八）

「つまり、天智七年五月五日の「蒲生野への

縦獵」に引き続いて、天智八年（六六九）五月五

日にも、葉狩りが行なわれることになった

のだった。

なお、鹿の若角（袋角）を鹿茸（ろくじょう）といひ、こ

れをかげ乾しにして補精強壯剤にするのであ

る。

「ところでは、今年（ことし）は少々遠出（とおいで）し、

おすむ 赴く 2329°
その方へ向って行く

ばうきお
状況

④ 4696- $\frac{1}{2}$ 4,698 $^{\circ}$ - $\frac{1}{2}$

all! ④ 4696 $^{\circ}$ - $\frac{1}{2}$ 1757

天智7年(668)9月2日 高句麗滅亡

へ天智天皇をはじめとする貴人達は、
地形的に相当する^{肥後国山鹿}へと南下
してゆかれたのであろう。
と考えてみたい。
淀川を菊池川に見立てるとき、
山鹿とはよく似たところにあるといえよう。
よ。また、山科も山鹿も共に
訓める。
それでは、一体何故、天智天皇の一行は肥
後国山鹿へ向かわれたのだろうか。
天智七年(六六八) 天智八年(六六九)
なにより、高句麗が唐・新羅軍と戦って
た昨年、五月五日と、高句麗滅亡後の今年
五月五日とは、全く状況が異なっているの
ある。
なるほど、天智紀八年五月五日条には
科野に縦獵したまふと記されて
かし恐らく、
天智天皇は、山鹿に隣接している菊池の
鞠智城へ赴かれたのであろう。
と推察される。

4,699^P-1/2

秋む 心める 1888^r 1889^r 新26¹⁰ 中臣内臣 紀下361末~
4698^P-1/2

五月五日

とあるあれ(天智八年)の天智天皇の行幸に、大
皇弟(大海人皇子)や、中臣内臣(未だ)
時は藤原内大臣ではない)や、群臣が、皆悉
く従っていった

※なお、あえて述べると、
中臣内臣、つまり中臣鎌足は、この時点
において元気だった

と想像される。
緊迫した情勢にあるとはいえ、人々は
大倭国へ向かう喜びを胸の内に秘め、船を連

築後川(千年川)の流水に、有明海を漕ぎ
渡り、やがて玉名に至ったのであろう。

そして五月五日、鹿と縁の深い中臣氏の所領
である日山鹿において、鹿の若角をとる
葉獵が行なわれたとであらうか。

こうして、葉獵の行祭が終ったとき、
天智天皇は、鞠智城へお入りになり、居城
とされたのであろう。

なお、鞠智城には、
舒明天皇(高市天皇)
によつて築かれたと思われ、
涼みヶ御所
が有ったようだと(第489・490・491・492回鞠智城参照)

④ 4659-1/2で
はにん

ニリようえ、よすが
其領 162 縁因・使 2282 1111エ
古 142
年(うめま) 221P 他(足もゆ)

4.699P-3/2

おまがえ
面影 327
142

④ 1946P
黍離の悲 224
屋 785
治時がえ 3P

治時がえ 3P
④ 4.175-3/3

三山の歌

● ぞん なる あり 日 の こと 天智天皇は、

口 鞠智城 (熊本県菊鹿町) を後にして、南

の方へ足を伸し、古の大倭国の京行幸さ小

たようである。

合志 (皮石) の原の宮城跡に、昔を偲ぶよす

かとなるものは、すてに無い

● ぞこには、其寥とした原野が広がっていた

あの日 洛水 (堀川) さえも、噂に聞いて

いた 往古の面影は なく 細い細い水路

と化した 溝の底を、わがばかりの水がちよ

ろちよろと流れて いる だけであつた。

● 農夫や、老いた 耕作人らが、昔のことも 何も知

らぬげに、身を屈めて 働いて いた。

大宮人達は、黍離の悲しみを 翹い、袖

を濡らした。

な お 先述のとおり、黍離の悲しみについて

● 周の太夫が 使いの道すから、かつての周の都 宗周 (周

の王都) の廢墟を通りかかり、ただ一面の 黍畑 になっている

三山の36
④4659P

三山
⑤1917-1/2
⑥2052P-1/2

新X(12) 96 4,700P-1/2

二と

う34
麗し
微笑み

⑤219P
⑥2048P

⑦734P
光景ありさま、様子→④4701P
情景⑧1088Pありさま

⑧4175P-3/3

という故事が有る(第七十六章「国史編纂」に
おいて既述) 詩経「黍離」の詩の序(他参照)

白川の北岸に立って、――白川の南に広

かるタクマ加原をむくと見わたすと、そこに
はひとときわ鮮やかな山容を見せる。タクマ三

山が あった。

二上の高山(香山)は、古の昔からずっと

変わらず、畝火の山をお慕い―つづけている

ことよ

「はい」まことに微笑ましく、麗しい情

景でございます

なお――熊本平野の真只中、託麻ヶ原の

広大な台地上には、まるで緑色の海原に浮かん

だ島のような風情の可愛らしい三つの山があ

る。(第12図参照)

今日では、北の方から南の方へ順に、

神園山(一八三M)、

小山山(一八九M)

戸島山(一三三M)

とい、総称して託麻三山と呼んでいる。

こと

④ 4659^P 同歌

かみよ 神代 万①-17^P 万幸次 万1-165^P 137^P

同歌 ④ 4659^P ⑥

4,700^P - 2/2

かんかひ、
感慨 484^P
身にみて交すること

⑤ 1917^P - 1/4
1918^P

（第二十八章〈香山〉^{かぐやま}の項において既述。「熊本の山」今江正知、熊本日日新聞社、九六頁参照）

「あの三つの山は、いま、新しい^{あたらしい}名で呼ば^よれております」

誰^{だれ}かかこう説明^{せつめい}するのを聞き流^{きなが}しながら、

「……！天智天皇は、感慨^{かんがい}深^{ふか}げに、その三山^{さんざん}のようすを見つめておりで^だな^なった。

やがて、天智天皇は、染々^{しみじみ}と、こう

お歌^{うた}いになった。（万巻^{まん}一^{いち}三^{さん}）

高山^{かぐやま}は雲根火雄々^{うねびを}と耳梨^{みみなし}と相^{あひ}あ

らそひき^{ひき}神代^{かみよ}より斯^かくにあるらし

古昔^{いにしへ}も然^{しか}にあれこそうつせみも

婦^{つま}をあらそふらしき（万巻^{まん}一^{いち}三^{さん}）

大^{おほ}意^い高山^{かぐやま}は、雲根火^{うねび}を男^{おとこ}らしく立派^{りっぺ}だ

と感^{かん}じて、その愛^{あい}を得^えようと耳梨^{みみなし}と争^{あらそ}った。

神代^{かみよ}からこうであるらしい。昔^{むかし}もこのようであ

ったからこそ、現世^{げんせ}でも一人^{ひとり}の愛^{あい}を二人^{ふたり}で

争^{あらそ}うことがあるものらしい。（第八十四章）

三人移す！

なつた

外輪山の山に月
かまると月を照らす

丸み、円み 2097

4682 1144 ~ 1947

4.701^P-1/2

4655^P-1/2 9行(311行)

へ宴の項において既述。「万葉集」(一)日本
古典文学大系、岩波書店、一七頁の注記参

照)

天智天皇のその声は、心なしか、甚しげで
さえあつた。

へ大海人皇子に、額田王の事を諦めさせ
るには、どうしたらよいだろうか

そんなとき、ふっと気がつく、有明の海

に、雲仙岳の山裾の近くに夕日があつて、
大海原の上に棚引く豊旗雲(大きくなびいた

雲)を、真赤に染めあげていた。

それは、恐ろしいばかりに美しい、輝やか

しい光景であつた。

大海人皇子の旗幟を思惟せたその

赤い豊旗雲も、陽が沈むやいなやみるみる色

褪せてゆき、いつしか、あたりはすつ

かり薄墨色に包まれてしまつていた。

うむ。大海人を、皇太子の位から降すこ

とにしよう

五月のほほ真ん丸の月が、東に昇

「わたつみ」については、④4703 祖す37 (世) 4701 P-2/2 大海=大海 入日=落日 156 採集略記 石④-17 P ⑤4704 11

えろ阿蘇外輪山の山際を離れようとしていた。

■その時、天智天皇は、心の内にわたかまる思いを吐き出すかのように、こうお歌いにな

つた。一万巻一五(一万巻一三)高

山は雲根火雄々しと✓の反歌

OK 第二番目の

わたつみの豊旗雲に入日見し

今夜の月夜さやに照りこそ

大意 大海の上に棚引く豊旗雲へ落日の

光が射るのを見た今夜は、月がさやかに照つ

てほしいものである。

たぶん、大海人皇子を

色褪せていつた口わたつみの豊旗

雲に大海人皇子を譬えているのであろう。

では、日月は、額田王を指しているのだらうか。

それとも、内心再び皇太子にいたいと思う大

友皇子のことなのであろうか。

その詳細について、は分らないものの、

天智天皇の胸中に、何か、期待するところが

あったことを思わせる歌である。

み吉野の吉野のさくら 吉野は島根県にあり
えき名 水越(みぎ)の下(もと) 桜(さくら) 黄心樹 大カンナ 無い

おかしなまのき 小賀木 元 286
モクレン科 白い花 ④4797 「水越」 「花」

4,702¹ - 1/2

次頁
から

のす あは ④4797 21/3 お(は) ④4797 2/3-20		↓	和五十年記念出版、朝日通信社、三〇七頁	美智子妃は「白樺」(白色) 常陸宮は「黄心樹」(黄色) である。	右は「桃」(桃色) 皇太子は「若竹」(緑色) 皇	身の回りの調度品などにシルシをつけて区別	供が生まれるとすぐに「おしるし」を定めて	皇室では、古くからのしきたりに従い、子	こに、数点、参考迄に述べておくことは
---	--	----------	----------------------------	---	---------------------------------	-----------------------------	-----------------------------	----------------------------	---------------------------

「おしるし」とは参照

11121
 天武紀元年 天武紀元年 天武紀元年
 天武紀元年 天武紀元年 天武紀元年
 天武紀元年 天武紀元年 天武紀元年

紀下 396 年 589 年
 紀下 396 年 589 年

4,702 P - 2/2

(669) 天武紀元年 5月5日 4698 1/2 14 行

「おほ」 皇大前科 307
 663 年 7 月 7 日

前頁

天武紀元年（六七二）七月二日条に、
 其の大海人皇子の衆の近江の大海
 友皇子の師と別け難きことを恐りて、赤色
 を以て衣の上に着く
 とあり、
 万巻二一九九の柿本人麿の歌に、壬申乱
 のことを叙して、
 下 捧げたる 幡の靡は 冬ごもり
 下 春さり来れば 野ごとに 靡くか如く
 下 着きてある火の 風の共 靡くか如く

身の色を定めて、いれゆる
 身の色を定めて、いれゆる
 身の色を定めて、いれゆる
 身の色を定めて、いれゆる

→ H5.9.14 (火)
H9.4.13 (日)

はんか 反歌 広1832' 長歌に本入2歌

主し 旗幟 小枝 466'

4,703

漢の高祖 = 劉邦 韓韓819' 232' 記(墨) 20' 終 大ナ7/720' 赤色 実市 強い赤
紀下589' 降旗は降参の色白旗 元731' 記(墨) 20' 89'

とあり、
古事記の序に、天武天皇の功業を述べて、
「絳旗耀兵。凶徒瓦解。」
（赤旗）兵を耀やかして、凶徒瓦解の
ごとく解けぬ。
とある。
敵軍は瓦解するごとく一挙に敗れました。
このように、大海人皇子方の軍は、服にも
旗にも、赤色を用いたようである。
尚、曰「赤い旗」（絳旗）といえは、
漢の高祖（劉邦）は、赤帝の子であると
自負し、旗幟に皆赤を用いた。
と、漢書、高帝紀にみえる。（「日本書紀」
補注二八一ニハ参照）
日本古典文学大系、岩波書店、五八九頁、

山は雲根火雄々しと、
の反歌として、
万葉集は、
万巻一三入高

の第二番目に

H31(2019)4/17(水)~4/19(3日)
令和元(2019)4/17(水)~4/19(4日)

元 1745
西暦
南に望む

4,704^P

4701-1/28

万巻1-14(第1巻の反歌)は
「香久山と耳梨山とあひ呼らち頂上(南印南国原)」

81-17 新
4701-1/2

10/7
11/7
16/6

一 一五へわたつみの豊旗雲に入日見しを掲
載してあり、この反歌に注記して、こう述べ
る。
「右一首の歌(わたつみの豊旗雲に入日見
の歌)、今宋ふに反歌に似す。ただし、
舊本此の歌を以ちて反歌に載す。故に今なほ
此の次に載す」
なるほど、反歌のようには見えないうが、
へ万巻一三と同一五の歌は、その昔か
ら一連のものである。と解される。
と考えられ、伝えられてきた、と解される。
● それにしても、わたつみのとあるにも
かかわらず、大和三山あたりから、海を望
むことは出来なり。
● 天智天皇の三山の歌は、大和三山を歌った
ものでなく、海を見はるかすことの出来
る託麻原の託麻三山を歌ったものなの
であらう、と思われる。
● なお、天智天皇の三山の歌には、
高山(香久山)にのみ、山字の字がある。
雲根火(畝火)・耳梨に、山字の字は付さ